

(37)

氏名(生年月日)	菊池尚子 キク イチ ナガコ
本籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第 348号
学位授与の日付	昭和54年1月19日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	メニエール病の治療に関する研究
論文審査委員	(主査)教授 上村 卓也 (副査)教授 藤田 昌雄, 教授 平田 幸正

論文内容の要旨

研究目的

メニエール病の病因についてはなお解明されない点が多く、治療法も一定していない。著者はその発症における自律神経異常の関与を重視して、メニエール病患者に自律神経用剤による薬物療法を試みた。その結果、このような薬物治療に抵抗する難治例の存在することが明らかとなった。そこで最近各種の難治性疾患に試みられている東洋医学的治療、とくに針治療を取り上げ、これがメニエール病に対しどのような治療効果を持つかについて検討した。

対象および方法

1. 昭和46年1月から49年12月までの4年間に東京女子医科大学耳鼻咽喉科を初診したメニエール病患者65例を対象として、自律神経用剤を主とした薬物治療を行い、その予後を2～6年(平均3.8年)後のアンケートによつて調査した。

2. 薬物治療に抵抗する難治性メニエール病65例に対し、20分間通電法による針治療を、10～15回を1クールとして行つた。その効果を、特にめまい発作については、観察期間、めまい発作の頻度と強さに関する一定の基準をもうけ、判定した。

結果

1. 薬物治療を行つた65例のうち、アンケートにより61例の予後がわかつた(回収率93.8%)。その結果は次のようであつた。

1) 61例中48例(79%)にめまい発作の改善をみた。このうち1年以内に効果の現われたものは41例で、全体の67%にあたる。

2) めまい発作の消失後も、半数以上の症例が耳鳴などの後遺症を訴えた。

2. 針治療を行つた65例の治療成績は次のようであつた。

1) 反復性めまい発作に対しては、治療点を工夫した現在の方法によつて、16例中8例(50%)に有効であつた。有効例には聴力が30dB未満の例が多かつた。

2) 難聴に対しては18例中7例(39%)、耳鳴に対しては18例中4例(22%)に有効であつた。難聴の有効例は平均聴力損失60dBまでの例であり、高度難聴者には効果はなかつた。

3) 平衡障害を主訴とした2例はいずれも改善した。

4) めまい発作消失後に、浮動感などの後遺症状を訴えた13例に対しては、明らかな改善はみられなかつた。

まとめ

メニエール病患者は上述の薬物治療により、およそ2/3の症例が1年以内にめまい発作の消失ないし軽減をきたした。しかし1/5の症例は難治性で、他の治療法を必要としていることがわかつた。また、難治例における治療成績より、20分間通電法による針治療は、高度の内耳障害を起こす前のメニエール病早期における治療法として有用であると思われた。

論文審査の要旨

本論文は、メニエール病の治療法のうち、最も広く行われている薬物療法の効果と限界を明らかにすると共に、対象を難治例に限定し、一定の基準を設けて針治療の本疾患に対する効果を検討したものである。メニエール病の治療に寄与する価値ある研究と認める。

主論文公表誌

メニエール病の治療に関する研究。

耳鼻と臨床 第24巻 補冊2号 644～655頁
(1978年)

副論文公表誌

- 1) カナマイシンによる進行性聴器中毒の1例。
耳鼻咽喉科 46 (8) 527～530 (1974年)
- 2) Forestier 病に由来した嚥下障害の1治験例。
日気管食道会報 26 (1) 28～32 (1975年)
- 3) 扁桃摘出術(全麻下)における Lage による出血量の差について。
日本扁桃研究会会誌 14 8～10 (1975年)
- 4) 周期性交代性眼振の1例。
耳鼻と臨床 21 (6) 906～910 (1975年)
- 5) 暗視スコープによる瞳孔径測定法。
耳鼻臨床 68 増刊号 1420～1422 (1975年)
- 6) 眼と頭の協同運動の分析(予報)。
耳鼻臨床 69 増刊4号 1819～1823(1976年)